

アレキサンドリアからの手紙

赤堀 雅幸

毎年何通か、わたしにはエジプトから便りが届く。研究者からの英文の手紙が多いが、それとは別に、手書きのアラビア語で思い出したように便りしてくれる人が幾人かいる。その一人—ここではかりにマフムードという名にしておく—のことを少し書いてみたい。

マフムードは今年25歳になる小柄な青年で、くりくりとよく動く目がいたずら好きの少年のような印象を人に与える。かれはアレキサンドリアの下町に生まれ育ち、この海辺の古い町から外に出たことはほとんどない。ホテルマンを養成する高等専門学校を卒業したが、思うような職に就くことができず、週に6日トリアノンという喫茶店で働きながら英語の学校に通い、自分の将来の道を模索している。

わたしがかれと初めて出会ったのも、このトリアノンでだった。エジプトに留学した1年目の夏、わたしはまだカイロに住んでいて、アラビア語の学校に通いながら広大なこの国をあちこちらと旅行して回っていた。アレキサンドリアの中心部にあって地中海を見晴らすサアド・ザグルール広場は、カイロをはじめとするナイル・デルタ各地からの長距離バスの発着場になっており、トリアノンはイタリア領事館やセシル・ホテルと並んでこの広場を囲み、前世紀以来のヨーロッパの影響を色濃く残したこの町の面影を今に伝えていた。

暑い盛りの頃で、バスから降りると、さっそくカイロのグロッピーと並び称される由緒ある名店で喉をうるおそうとわたしは店に入った。このとき、お世辞にも上手とは言えない英語を笑顔で補って、気さくに話しかけてきた蝶ネクタイに緋

のベスト姿のボーイがマフムードだった。

1988年から1991年にかけてのエジプト留学の目的は、わずかばかりの文献で聞き及んでいるアウラード・アリーと自称するベドウィンたちの間で、文化人類学のフィールド調査を実施することにあつた。かれらが暮らしている西部砂漠の地中海沿岸一帯へは、アレキサンドリアを起点にしてバスか列車で行くことができる。それもあって、わたしは1年目の秋にカイロ大学からアレキサンドリア大学に所属を移し、トリアノンに程近い裏通りに小さなフラットを借りて、毎週定住したベドウィンたちの住む村に通う生活を始めた。

このころからわたしとマフムードは毎日のように顔を合わせるようになった。トリアノンでの仕事が終わると、マフムードは市電の駅まで歩く途中でわたしのフラットに立ち寄り、1時間かそれ以上、ときには半日あまりもアラビア語のエジプト方言を手ほどきしてくれた。といっても、別段わたしがかれを家庭教師にやとったのではない。あらためてそうした依頼をしたことはないし、かれも教師面したり謝礼の類いを要求したりすることはいっさいなかった。たいていはあれこれとたがいの身に起こったことを話しているうちに、それはこう言った方がいい、あれは古くさい言い方だとマフムードがわたしの言葉遣いを正してくれ、それで少しずつわたしの会話が上達していったというわけだった。わたしが今、まがりなりにもアラビア語を話せるとすれば、それは大半マフムードのおかげと言わなくてはならない。

それ以外にも二人は連れだってよく出かけた。わたしたちは新聞紙で包んだリップ（スイカやカボチャの種を炒った食べ物）を片手に、流行のハ

リウッド映画をわいわい言って見たり、夜のアフワ（茶店）でトルコ・コーヒーをすすりながらチェスやドミノに興じたりした。海辺のレストランで地中海の幸に舌鼓を打ったり、あやしげなギリシア人の骨董屋の店をひやかしたりということもあった。マフムードの家にも二度三度と招かれ、数百円で何キロと買える季節の果物を手土産にしては、かれの母親の心のこもった手料理をごちそうになった。かれの父親からは装丁の美しいクラアンを1冊贈られ、それは今もわたしの書棚の一番よい位置を占めている。

やがて、やっとのことではあったが住み込み調査の許可がとれ、アレクサンドリアから200キロほど離れた村にわたしは居を移した。当然、毎日マフムードと会うわけにはいかなかったが、それでも交流は途切れることにはならなかった。ひと月に1回アレクサンドリアに出て、砂漠からの長距離バスがサアド・ザグルール広場に着くと、わたしは砂ぼこりをはらってトリアノンに向かい、マフムードは「よく帰ってきた。砂漠のベドウィンは元気か」などと軽口をたたきながら、よく冷えたステラ・ビールを持ってきてくれた。

1991年の初めに帰国することになったときに、前の日村のベドウィンたちに見送られてきたわたしを、アレクサンドリアで最後まで見送ってくれたのもマフムードだった。わたしたちは宵闇の迫るサアド・ザグルール広場で再会を約して別れた。

再会の約束は一度、短い期間ではあったが1993年に果たされた。ひと夏を再調査に費やすべくエジプトにわたったわたしは、マフムードの兄の婚約の祝いの品とマフムード自身への御土産を携えて、実は緊張してトリアノンを訪れた。マフムードはいつものようにそこにいて、満面の笑顔でわたしを出迎え、即座に店長に許しをえて蝶ネクタイをはずすと、わたしの手を引いて自分の家に連れていった。

その後は折りにふれて手紙のやりとりが続いている。もともとアラビア語の手紙は定型的なふうが強い上に、家族の近況などを知らせあう、い



アレクサンドリアの街並

たって散文的な内容の短い手紙ばかりで、マフムードがそれを書いていたときの心情などなかなか推し量ることはむずかしい。それでも、かれがいつも手紙の締めくくりを書く「親愛なる友よ、神が望みたもうならば、1日も早く帰り来たることを楽しみにしている」というひと言は、それ自体ごく普通の表現ではあるのだけれども、その度ごとにわたしの目をそこにとどまらせる力を持っている。

フィールドを離れて日本にあって、わたしはときおり自問する—わたしとマフムードの関係は何なのだろうか。友人と言ってしまえばそれまでだが、生まれも育ちも違い、職業も違い、かといって「調査者」と「調査対象」などではなく、たがいの生活の接点もときたまにしか得られない。それでも、この「友人」はわたしにとって大きな存在であり続けている。あるいはそれは、かれとのつきあいを通して、自分のエジプト滞在が「フィールド調査」という仕事のために「あちら」にいつとき滞在しただけのものではないのだと、わたしに感得されるからかもしれない。そしてそのとき、わたしは自分が返信の最後にいつも書く結びの言葉、「もっとも親愛なる友よ、わたしは帰るだろう、神が命じたもうならば」も単なる決り言葉ではないのだと悟らされるのである。

わたしはこの約束を繰り返し果たし、果たすところから何が見えてくるか、じっくりと考えなくてはならないだろう。

(あかほり まさゆき 専修大学)